

# 西の菜時記

特集：井上馨 そでときばし 袖解袴の事件から奇跡の復活

◆山口市菜香亭：〒753-0091 山口市天花1丁目2番7号 TEL:083-934-3312 FAX:083-934-3360◆

平成27年1月10日発行  
第35号

発行元：山口市菜香亭  
指定管理者  
特定非営利活動法人  
歴史の町山口を甦らせる会

馨は17歳になると兄の五郎三郎と萩城下に出て、藩校である明倫館に自炊しながら通学するようになりました。その2年後、嘉永6年黒船来航：江戸幕藩体制が揺らぎ始めました。さらに2年後、馨は長州藩主毛利親の参勤交代にしたがい初めて江戸へ出ました。このころ桂小五郎をはじめ若き志士たちと親交を深めたようです。桂小五郎が塾頭を務めた齊藤弥九郎の塾で剣術修業もしました。しかし、剣の才に恵まれていないとの自覚もあり、文での出世を目指し蘭学修業に励みました。最も影響を受けたのは蘭学の岩屋玄蔵でした。西洋式砲術や科学技術を学ぶために岩屋が江戸を離れ郷里（佐賀県武雄）に帰るときには、師に従って下りたいと藩に許可をもとめたほど入れ込んでいたのです。

## 馨の青春く挫折を乗り越え蘭学修業に光を求め：

江戸に出る前は井上馨は井上文乃輔という名前でしたが、馨が見聞が広く、物をよく知っていることに毛利敬親が感心して「聞多ぶんた」という名を授けました。（以後文中では井上馨を「聞多」と表記します。）



国立国会図書館ウェブサイトで

井上馨は、天保6年11月28日に現在の山口市湯田温泉に生まれた。武士ではありませんでしたが、その生活は農夫と変わらない質素なものでした。父の光亨はとて厳格で、朝は日の出とともにみなを起し、馨は米か麦を一日ひかなければ朝食をとらせてもらえませんでした。朝食が済むと稽古場に通り、文武を修めました。夜は10時まで一つの行燈を囲んで内職し、その後馨は昼間聞いた講義のおさらいを…。眠くなることしばしばあり、そういうときは父が竹鞭で打って覚醒させたそうです。

## 馨の生い立ちく涙ぐましい少年期

## 幕末の志士であり、初代外務大臣 菜香亭名づけ親 井上馨 没後100年

その後、農夫たちの手で聞多はかごに乗せられ自宅に担ぎ込まれたのでした。血だらけになってすでに蚊の息の聞多は、手まねで兄に介錯を頼みました。兄はどうせ助からないならひと思いに死なせてやるのがせめてもの優しさ、意を決して刀をぬきました。



同じ長州藩だが、対立していた保守派に襲われた。

聞多は三人に囲まれ背後から足を拘束され、倒された背中をばっさり斬られてしまった。聞多は気丈にも立ち上がって刀を抜こうとしましたが、更に顔を深く切り込まれました。聞多は必死でその場を逃げました。逃れたものしばらく気が失って、意識がもどったときには畠の中でした。のどが渇いたまま農家のともし火を見つけてそこに転がり込みました。



母の制止がなければ……。恐るべし「母の力」戦前の道徳の教科書に採用された。

（注）「ぶんた」または「もんだ」と呼んだようです。正式には「ぶんた」、通称「もんだ」という説もあります。

## ◆菜香亭市民ギャラリー出展作品紹介・予定表◆

### <市民ギャラリー出展作品の紹介>

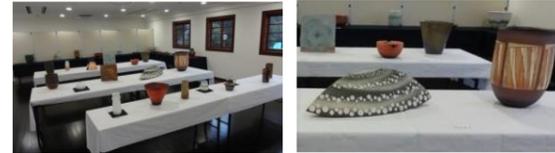
春夏秋冬 in 山口2014展  
—中村修啓・宮原延恵— 10/24~10/27



第10回山口の秋を彩る“陶芸と書道”の展示会  
—陶酔工房— 11/15~11/16



第13回よもぎ会作陶展“土のかおりin山口”  
—「よもぎ会」平井陶芸クラブ— 12/20~12/21



<平成26年度 市民ギャラリーの予定> 1・2・3月

月日	時間	タイトル	主催者
1/23 ~25	9時~17時 (初日のみ13時から、最終日のみ16時まで)	てぬい展 ~しかけのあるてぬいと 山口のてぬい vol.4~	山口県立大学 文化創造学科
2/5 ~8	10時~17時	やわから写真展 ~時間旅行~	山口若者カメラ イフ(yawaColor)
3/6 ~3/8	9時~17時	わんこの紙粘土展 ~いぬのはなしin山口~	正礼 和詩 しょうだ わこ

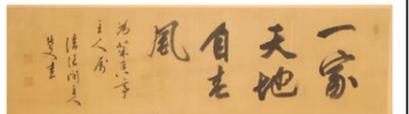
出展ご希望の方は、2ヶ月前までにお申し出ください。

(お問い合わせ)  
TEL: 083-934-3312  
FAX: 083-934-3360



## 初代総理と菜香亭~大広間の扁額に寄せて

菜香亭初代館長 福田礼輔



“一家天地自春風”150畳敷の大広間に掲額された来館総理大臣のうち、明治の初代総理大臣伊藤博文の額である。

伊藤博文は山口県熊毛郡東荷村（現在は光市）に1841（天保12）年に出生し、10才の頃父に連れられ萩城下に移り若年奉公をしながら時の松下村塾で学ぶようになる。

当時の日本の人口は2千5百万人程度であったが萩は城下町として面目を保っていた。

当時の長州は平民を含む志願者で編成された奇兵隊という組織を持っていた。その組織を充実させたのは主として松下村塾の出身者であった。高杉晋作、木戸孝允等の上級藩士と共に伊藤博文、山県有朋など下級武士仲間も活躍するようになり、階級なしの軍隊は農民、町人、足軽などで編成されて明治新体制へのたくましい原動力となる。中国地方は日本列島の中ではもともと人口の多いところだが、住み慣れた場所を離れて防長二州に来た人たちには士的エネルギーが充実していた。

伊藤博文が現実主義的な政治行動を開始したのは1863（文久3）年、藩命でロンドン留学中のことだった。井上馨、山尾庸三、遠藤謹助、井上勝、それと伊藤の長州ファイブと呼ばれる一行である。伊藤と井上馨はロンドンで長州藩の関門海峡での欧米艦隊との対立を知りイギリス艦で急ぎ帰国するも徒労に終わった。

伊藤はヨーロッパで学び、明治憲法をつくり、政堂の総裁で活躍して総理大臣になったが明治末期に朝鮮半島で凶弾に倒れる。

東京上野の精養軒で修業し第3代菜香亭主人の西洋料理で伊藤博文は友人たちとワインを飲んだ記録が残されている。

## 聞多遭難く九死に一生

元治元年9月25日、毛利敬親の御前会議で、聞多は「禁門の変については謝罪するけれども幕府が攻めて来たら戦う」という武備恭順を主張しました。幕府に従って衝突を避けようという保守派の面々は聞多の堂々とした主張にぐうの音も出ませんでした。その夜の事。聞多が湯田の自宅に帰る途中、同じ長州藩の保守派の面々から辻斬りされるという事件が起こりました。